

# 佐野遺跡 (第8次)

—— 県道交差点改良工事用地内  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ——

1989. 3

長野県下高井郡山ノ内町教育委員会

# 序

佐野遺跡は山ノ内町の数ある文化財の中でも国指定による史跡で、関係者は勿論、地域の皆さんが大切に考えられているものであります。

この遺跡は過去7回、諸事由によって発掘調査が行われましたが、今回の調査は交通事情等の変化に伴い生じたものであります。

地域の要望に添って、中野建設事務所のご配慮により、道路改良計画が樹てられました。しかしながら、場所が重要な遺跡指定内ということから、教育委員会は慎重に対処し、町文化財保護審議会の意見を求め、更に文化庁担当係官、県文化課のご指導をいただき、発掘調査が実施出来るに至った次第であります。

調査は盛夏の8月11日から8月31日までの間に行なわれました。調査結果は、予想を超えた多くの遺構、遺物が発掘され、貴重な資料を得ることができました。今後、多くの方々にご活用されることを希うものであります。

この調査にご協力いただき調査報告書をまとめていただきました、永峯光一先生を団長とする調査団各位をはじめ、調査実施にあたりあらゆる面でご理解ご協力を願った南部協議会、関係区長の皆様方に感謝申し上げます。また、長い間ご迷惑をおかけしたにもかかわらず、深いご理解を賜りました皆様方に深甚なる敬意を表して序文といたします。

平成元年3月

山ノ内町教育長 谷本 利夫

# 例 言

- 1 本書は、山ノ内町大字佐野字谷地614—2の県道改良工事に伴う緊急発掘調査である。
- 2 発掘調査は、山ノ内町教育委員会が主体者となり、昭和63年8月11日から8月31日までおこなった。
- 3 発掘調査は、文化庁・県教委文化課小林秀夫・百瀬長秀両指導主事・金井喜久一郎顧問・永峯光一調査団長・金井汲次団長代理の指導のもとに、田川幸生が他の調査員と協力しておこなった。
- 4 調査の整理は、調査団の永峯光一・金井汲次・高橋桂・関孝一・酒井健次等の指導助言を受けながら、田川幸生がおこなった。
- 5 本報告の1・2・4・5は、田川幸生がおこない、3は、山ノ内町教育委員会の小林貞信社会教育係長がそれぞれ執筆分担した。
- 6 遺構の写真撮影は、山ノ内町教育委員会の小林貞信・渡辺千春がおこなった。図版の作成は、田川幸生がおこなった。
- 7 佐野遺跡の環境は、「佐野の歴史」と中山清文山ノ内町教育委員長の協力により作成した。
- 8 出土遺物は、山ノ内町教育委員会が保管している。

# 目 次

|                     |    |
|---------------------|----|
| 序                   |    |
| 例 言                 |    |
| 1 佐野遺跡の環境           | 3  |
| (1) 佐野遺跡の位置         | 3  |
| (2) 佐野区内の遺跡         | 3  |
| 2 第1次から第7次までの発掘調査概要 | 4  |
| 3 発掘調査の経過           | 6  |
| (1) 県道改良計画          | 6  |
| (2) 発掘までの経過         | 6  |
| (3) 調査団の構成          | 6  |
| (4) 調査日誌            | 7  |
| 4 発掘調査              | 9  |
| (1) 土層              | 9  |
| (2) 遺構              | 12 |
| (3) 遺物              | 16 |
| 5 まとめ               | 22 |

## 1 佐野遺跡の環境

### (1) 佐野遺跡の位置 (第1図)

山ノ内町の中心部の平地は山ノ内盆地と呼称されている。この盆地の中央部を流れる夜間瀬川の南西部が町の南部地区である。また、南部地区の集落のほぼ中央が佐野区である。佐野遺跡は、この佐野区の中央南部の三沢川の右岸に発達する遺跡である。遺跡付近の地形は、三沢川添にあって、西北に広がるゆるい傾斜地である。佐野区の周辺をみると、北東は夜間瀬川をはさんで町の中心部の温泉街に接している。東南側は、観光地志賀高原に連なる山地で、西側は中野市に接する浅い山である。南側は山あいの菅・寒沢の農村、北西は比較的平坦な戸狩の農村である。佐野区も農村であるが、遺跡付近は南部地区の中心地として、地区公民館(旧村役場)・小学校・農協・公衆浴場等が現存している。また県道の交差点であり、交通量がはげしい。

### (2) 佐野区内の遺跡 (第1図1～8)

#### 〔原始・古代遺跡〕

佐野遺跡1 後述の第一次から第七次までの項参照。上佐野遺跡2 縄文草創期・中期と平安の黒色土器が出土している。鎧堂遺跡3 平安末の須恵器・土師器等が出土する。前林遺跡4 縄文中期や平安の須恵器・土師器が出土する。三沢川をはさんだ佐野遺跡の対岸であり、今後注目される。堀の内遺跡5 付近に湧水があり、平安の黒色土器が出土している。佐野境遺跡6 平安の須恵器・土師器が出土する。以上の遺跡のほとんどは三沢川添である。

#### 〔中世 小島氏の関係遺跡〕

伝承大日堂跡1 当遺跡に隣接する農協付近が、興隆寺(本尊は県宝)の前身の大日堂跡とされている。寺伝によると、天文5年真田幸隆が大日如来を安置し幸隆寺と称した。天文19年大雨で流出したので、堀の内館跡へ移ったという。第六次の発掘調査は、農協の敷地で、中世の土器や宋銭が出土した。旧横堰1 佐野の穀倉地帯の水路は横堰である。堰は、県道湯田中・菅線にそって流れ、佐野遺跡を横切り三沢川に落ちていた。明治以後遺跡付近の宅地化が進み、水路は遺跡の東で切られてしまった。水路は、小島氏により開かれたとされている。佐野小島氏館跡・幸隆寺屋敷跡5 中世の地方豪族小島氏館跡とされ、幸隆寺屋敷跡が一部重なる。後に興隆寺と改称し、現在地へ移転したという。宮の諏訪社7 佐野神社の本殿は、重要文化財である。明治41年の村内の神社合併の際に、宮の諏訪社の本殿を移したのである。本殿は天文20年に小島内膳亮昌吉により再建された。菅城跡8 区の西方山中に城が小島氏の城とされている。

## 2 第一次から第七次までの調査概要

佐野遺跡の発見は昭和6年故神田五六氏によってである。翌昭和7年故八幡一郎氏の眼にとまり、学会に紹介されたのが始まりである。発掘調査は戦後からである。

第一次調査（昭和33年11月21日～同23日）トレンチ2本・46㎡調査する。

第二次調査（昭和34年8月1日～同7日）トレンチ3本・47㎡調査する。2年連続しての学術調査で、佐野畑中1,175番の果樹園である。主な遺構は集石址7基・石囲みの炉址・埋設土器等である。遺物は土器破片が主であるが、皿形・台付皿形・注口・壺形・鉢形・粗製深鉢形・甕形等多量である。続いて石器では、有茎石鏃が多量に出土した。そのほか石器では、尖頭器・石錐・石匕・石篋・磨製石斧・打割器・敲打器・石皿・石臼・凹石・磨石・石剣・石刀等である。石製品と土製品では、垂飾・土偶・耳飾・剣状土製品・スタンプ状土製品・円板状土製品等である。この調査の指導者は、故神田五六氏と永峯光一氏（現国学院大学文学部教授・以後の調査はすべて調査団長）である。報告書は、昭和42年に山ノ内町教育委員会と、長野県考古学会から「佐野」の名称で発刊された。内容は、研究と調査の経過・遺跡・出土遺物・佐野式土器の編年・写真・図版等で100ページを超える。佐野遺跡研究には欠くことのできない報告資料である。

範囲確認調査（第三次調査・昭和50年8月17日～同21日）グリット50・185㎡調査する。第一次・第二次の調査をした地番が、個人所有から農業協同組合と変わり、遺跡の消失が問題化した。地元の佐野区や地域研究者により、史跡指定を受け保存しようという運動が高まった。国庫補助金による、範囲確認調査が上記の期日に行なわれた。その結果、遺跡の範囲が明らかになり、昭和50年12月「佐野遺跡範囲確認報告」が山ノ内町教委から発刊された。遺跡は、三沢川の右岸の佐野の字畑中・谷地に広がっていた。不整形のくの字形の範囲で、面積約7000㎡に及んだ。なおこのおりに、遺跡下方の湧水地帯や、遺構・遺物・土層の調査もできた。そしてこの資料が基本になり、昭和51年12月25日に史跡指定（官報第178号 谷地24筆 畑中4筆 右の地域内に介在する道路数及び水路等を含む）を受けた。

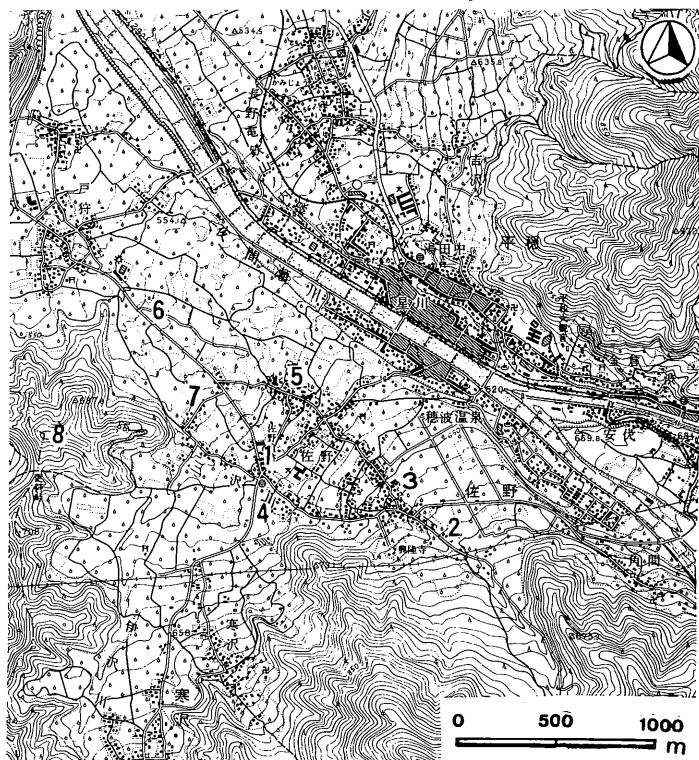
第四次調査（昭和52年6月24日～27日）史跡内の宅地の1,015番地の改築にともない調査する。162.32㎡に20グリット設定する。水田・宅地化等により攪乱されており、遺構確認ができなかった。遺物は、縄文晩期の佐野式土器破片等約50点と石器が数点であった。中世の須恵質土器も2点出土した。（「第四次佐野遺跡緊急発掘報告書」昭和52年山ノ内町教委）

第五次調査（昭和54年4月20日～23日）史跡内の旧村営診療所跡地（614番141—15）を整地し、駐車場として利用するため調査した。29グリット・116㎡を発掘した。遺構として集石址2基を検

出した。集石址は遺跡公園内に移転した。遺物は、縄文晩期の土器67点・石鏃6点・古銭2点等である。(第五次佐野遺跡緊急発掘報告書) 昭和54年山ノ内町教委)

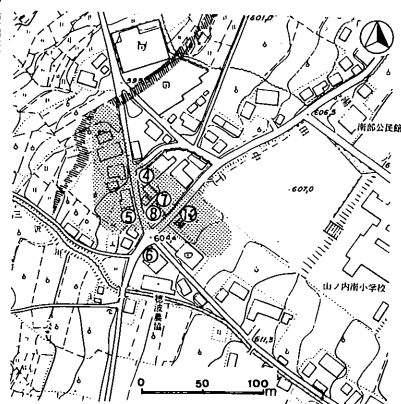
第六次調査(昭和55年6月11日～同30日) 史跡外であるが、穂波農協の改築にともない調査をする。全面にグリットを設定したが、障害物が多いため約130㎡だけ発掘した。中世の遺構とみられる集石址5基と火葬墓1基が検出された。遺物は中世の土器片2点・人骨片少量・古銭と鉄釘各2点出土した。縄文関係では無文土器2片と石鏃2点である。中世の大日堂跡地と伝えるが、堂跡の検出には至らなかった。(「佐野遺跡第六次発掘調査報告書」昭和56年3月山ノ内町教委)

第七次調査(昭和57年7月13日～同18日) 史跡内614番の住宅の一部改築のため調査をする。12グリットを設定し32㎡の発掘をした。縄文時代晩期の集石址3基と、土器約700点・石器は石鏃を主に56点、そのほかの石製品・骨片等15点の出土をみた。水田や宅地化による攪乱がはげしく、遺構は検出できなかった。(「佐野遺跡第七次発掘調査報告書」昭和57年3月山ノ内町教委)



第1図 佐野区内主要遺跡

- 1、佐野遺跡・伝承大日堂跡・旧横堰
- 2、上佐野遺跡
- 3、鑑堂遺跡
- 4、前林遺跡
- 5、堀の内遺跡・佐野小島氏館跡・幸隆寺寺屋敷跡
- 6、佐野境遺跡
- 7、宮の諏訪社跡
- 8、菅城跡



第2図 佐野遺跡の発掘位置

- 中の数字は調査発掘回数
- 遺跡の範囲(第3次調査)
- ▨ 湧水線

### 3 発掘調査の経過

#### (1) 県道改良計画

当地は南部地区の中心地であって、角間・中野と宮村・湯田中（停）線の2本の県道が縦横に交差し、産業と住民生活を支える要所である。

昨今の交通事情の変化にともない、車の急激な増加と大型化により、道路改良を余儀なくされるに至った。地元地区住民の切なる要望により、中野建設事務所において、当交差点の改良計画の検討がすすめられた。

しかるに、当地は史跡、佐野遺跡（昭和51年12月25日国指定）の範囲内にあるため、県文化課・文化庁と再三にわたり協議を重ねた結果、この貴重な遺跡の中の道路改良も今日の交通事情を勘案し、現状変更も止むを得ないという観点から改良計画が進められるに至り、本遺跡の緊急発掘調査が計画されたのである。

#### (2) 発掘までの経過

昭和60年11月20日、山ノ内町南部協議会長、佐野区長、寒沢区長等で組織する県道宮村湯田中（停）線末改良区間改良整備促進懇談会から町へ陳情書が提出された。慎重協議を重ねた結果、昭和63年2月22日中野建設事務所から史跡の現状変更許可申請書が提出された。

山ノ内町教育委員会では慎重審査のうえ、3月9日長野県教育委員会及び文化庁へ書類を提出した。6月16日埋蔵文化財発掘調査通知の提出。これにともない6月17日発掘調査団の編成、7月27日、南部公民館に於いて発掘調査結団式を挙行了。8月10日、文化庁の現状変更許可をうけ、8月11日から発掘調査を開始した。

#### (3) 調査団の構成

|       |                         |        |
|-------|-------------------------|--------|
| 調査責任者 | 山ノ内町教育委員会教育長            | 谷本利夫   |
| 参 与   | 山ノ内町南部協議会<br>中野建設事務所    |        |
| 顧 問   | 山ノ内町文化財保護審議会会長          | 金井喜久一郎 |
| 団 長   | 日本考古学協会員 国学院大学教授        | 永峯光一   |
| 団長代理  | 日本考古学協会員 山ノ内町文化財保護審議会委員 | 金井汲次   |
| 調査主任  | 日本考古学協会員                | 田川幸生   |
| 調査員   | 〃 飯山南高校教諭               | 高橋 桂   |
|       | 〃 須坂東高校教諭               | 関 孝一   |
|       | 長野県考古学会員 梓川高校教諭         | 酒井健次   |

|       |                                 |      |
|-------|---------------------------------|------|
|       | 山ノ内町文化財調査員                      | 山上右八 |
|       | 〃                               | 〃    |
|       |                                 | 畔上秀雄 |
| 事務局   | 山ノ内町教育委員会事務局長 黒岩西男／社会教育係長 小林貞信  |      |
|       | 同係 白鳥美恵子／渡辺千春／学校教育係 児玉雅人        |      |
| 調査協力  | 山ノ内町建設課 朝日忠明／野竹恵雄／中村賢一／内田茂美     |      |
|       | 山梨文化財研究所 鈴木 稔／河西 学              |      |
| 調査参加者 | 山本満博／外谷博美／原沢進／武田裕子／浦野薫／小林かず子    |      |
|       | 山口はるい／河上シズエ／山本初江／富岡のぶ子／山本はなの    |      |
|       | 永池千代江／山口夏枝／藤沢高広／小林律子／田川ふじ子／田川みき |      |

#### (4) 調査日誌

8月11日（曇・晴） 発掘調査用の器機材の搬入をする。地上の障害物を除去したが、地下埋設のパイプ・コンクリート塊などの障害物の露出がみられる。

8月12日（雨・曇） 調査区東側の境界線を基準にして、4㎡の正方形グリット33区設定する。レベルは「史跡佐野遺跡」の標柱北の角下部603.015mを基準にして測量する。

8月13日（晴） C4区付近の盛土（調査区外近辺から近年盛土・ⅠA層）から、縄文土器小破片や石鏃数十点採集する。\*お盆の14日～16日は、調査を休止した。

8月17日（晴・曇） 表土（ⅡA層）の除去作業をする。木株・旧庭園石・コンクリート溝・上下水道パイプ・地上標柱用基礎等の障害物がみられる。遺物は調査区全面に散布しており、縄文土器小破片等数十点に及んだ。

8月18日（曇） 前日に続き、表土下の旧水田床土（ⅡB層）まで掘り下げる。遺物は全面に散布し、縄文土器小破片等数十点である。障害物のパイプ等さらに増える。

8月19日（雨・曇） 旧水田床土部（ⅢA層）の調査に入る。障害物のまわり以外は攪乱がなく、安定した土壌なので注意深く発掘する。出土遺物は、上層部とほぼ同様である。作業は大小の礫のまじる堅い土質と障害物のためはかどらない。今後は調査可能な位置を選び発掘を進めることにした。

8月20日（晴） E4・F4区のⅢA層を精査し、小集石3か所検出する。集石内に小破片の土器が若干みえる。遺構になるかどうか、調査方法を検討し調査を続ける。

8月21日（晴） 前日の小集石の周辺を清掃し、写真撮影と実測をする。

8月22日（晴・曇） 引き続き小集石の実測をし、内部を精査した。小集石は人為的ではなく、自然集石と断定し、以後の調査に生かすことにした。自然集石の下層に無遺物層（ⅢB層）の所在を確認する。さらにその下層（ⅣA層）に遺物包含層の所在を確認する。

8月23日（晴） Ⅳ層を調査し、ピット4基（P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>）をほぼ等間隔・直列状に検出する。

8月24日（雨・曇） 4基のピットを精査し、写真撮影をする。ピットの内外は、大小の礫が



まじり、縄文土器破片が散乱していた。

8月25日(曇・雨) 4基のピットをさらに精査し実測する。商店の車の出入口のため、E4・F4の遺構を埋める。G4・H4のIII層を調査したが遺構なし。縄文土器破片数十点出土する。長野県教育委員会文化課の小林・百瀬指導主事を招き、現地で指導を受けた。

8月26日(曇・雨) G4・H4区のIVA層から、4基のピット(P<sub>5</sub>~P<sub>8</sub>)を、ほぼ等間隔・直列状に検出する。前日埋めたピットと直列状に並ぶが、せまい範囲での検出のため、性格等すべて不明である。

8月27日(曇) P<sub>5</sub>~P<sub>8</sub>の精査をし、写真撮影をする。ピットの内外は、先日調査のピットと同様に、大小の礫にまじって土器破片が散乱していた。

8月28日(晴) P<sub>5</sub>~P<sub>8</sub>をさらに精査し、実測と写真撮影をする。

8月29日(晴) J4~K4区の調査にはいる。水田床土下層下部(ピット遺構のIVA層に相当)より、土壌2基(SK01・SK02)を検出する。実測と写真撮影をする。

8月30日(晴) SK01の内部の調査をし、実測と写真撮影をする。SK02完掘する。

8月31日(晴) SK01底部を調査し、切り合った土壌(SK01-E・W)であることがわかる。土壌の実測と写真撮影をし調査を終える。

9月1日(晴) 遺物の整理・調査区内の整備をする。午後4時から現地説明会をおこなう。

9月2日(晴) 遺跡・遺構の全体測量をおこなう。

9月3日(晴) 土層断面の実測をする。

9月4日(晴) 写真撮影・実測図の点検を現地でおこなう。

9月5日(雨) 山梨文化財研究所員2人により、H4付近の土層転写作業をする。小雨のため、テントを張り作業を続ける。

9月6日(雨) 前日と同様、テントの下で土層転写作業をし作業を完了する。調査用の器機材を撤収する。

## 4 発掘調査

### (1) 土層

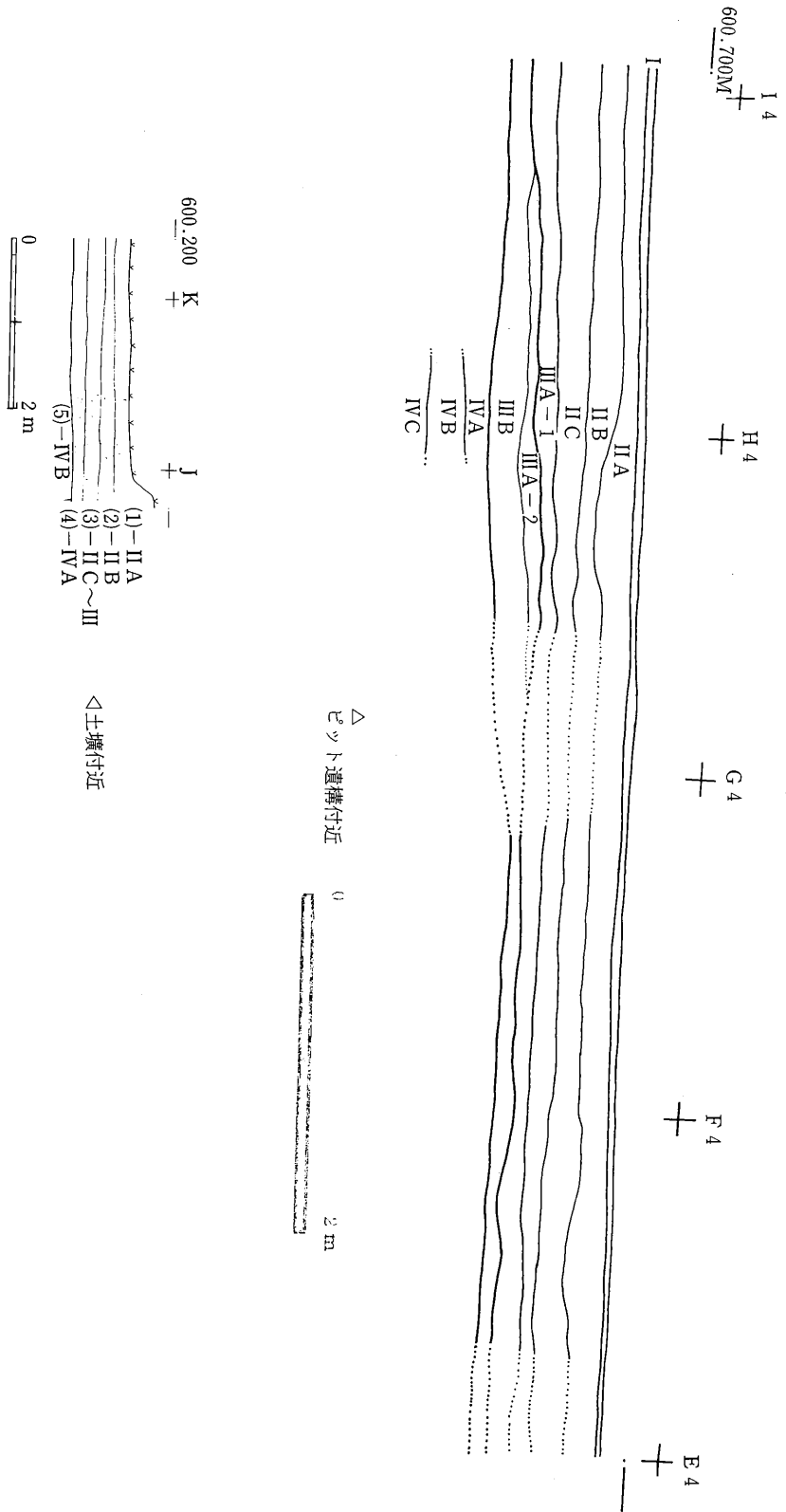
今回の調査で、土層の確認できた位置は、ピット状遺構の検出されたE4からI4までのライン上と、土壌の検出されたJ4・K4付近のライン上の二か所である。この二か所の土層は、それぞれ異なった土層であるが、ピット遺構付近の土層を先に示し、土壌付近の土層を関係付けて述べる。土層を分けた基準を示す。第I層 近年他から搬入した土石等である。第II層 近世以後の耕作土とその下の不安定層(IIA・B・C層)である。第III層 近世以後人為的作用がない層(IIIA・B層)である。第IV層 遺構の存在する層及びそれ以下の層(IVA・B…)である。

#### [E4からI4(ピット遺構付近)土層] (第3図・図版3)

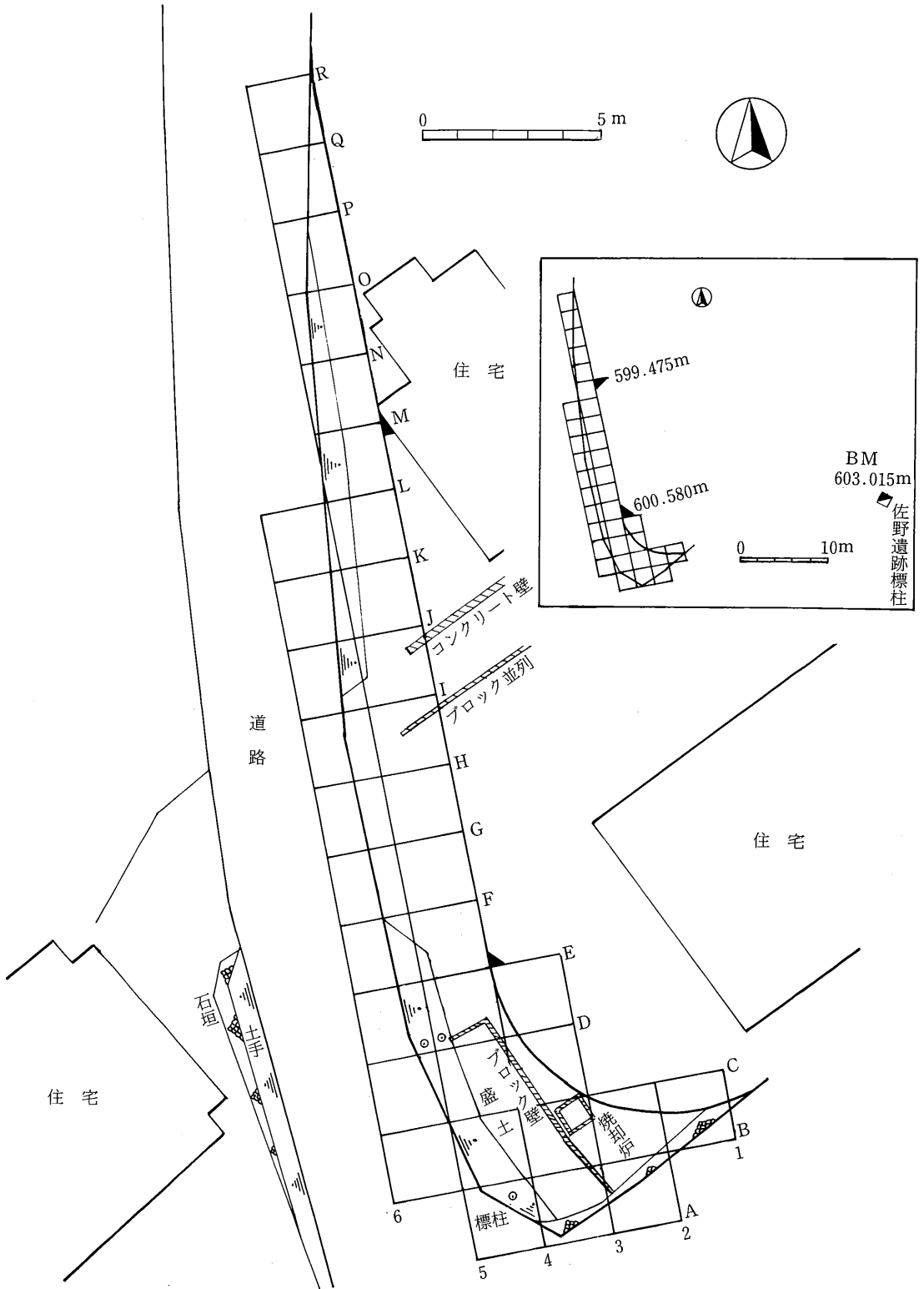
- I層 コンクリート舗装(I4ライン外に盛土若干あり)である。
- II層 A 舗装下の砂利と耕作土が混合し固い。遺物少量含む。B 水田の褐色土と粗粒砂混合する。少量の炭化物と風化礫を含み固い。遺物少量含む。C 水田床土に鉄分・マンガン集積する。粗粒砂が多く細礫点在し固くしめる。遺物を包含するが、何となく不安定な層である。
- III層 A 赤褐色土の粗粒砂に細礫が点在し、しまりがある。遺物を包含するが、遺構確認ができない。B-1 B-2と同一層だがレンズ状らしい。褐灰色土や粗粒砂を含み若干やわらかい。遺構・遺物が全くない。B-2 赤灰色や明石炭色土等で、中礫・細礫・粗粒砂等場所によって異なる。土砂はやわらかく堆積しており、三沢川の氾濫によるものか。遺構・遺物全くなし。
- IV層 A B-2の土砂が染み込み、色が似ているがやや黒っぽい。下層は岩礫が少なくなる。ピット遺構や遺物を検出した。B 上部はA層から、下部はC層の色が互いに染み込む。砂質土で、礫はところどころにあるのみ。遺物・遺構全くない。C 明褐色の砂利状の層である。大礫・細礫を含む。三沢川の大氾濫により形成されたものか。遺物・遺構全くない。

#### [J4・K4 (土壌付近) 付近土層] (第3図)

- 1層 上記のIIA層に相当する。旧耕作土であって、褐灰色でやわらかい。遺物少量含む。
- 2層 水田土壌であって、前記のIIB層に似る。
- 3層 水田の床土を含み、前記のIIC層に似る。土壌の検出は、この層の下層付近であったり、遺物の多いことからすると前記のIIIA層からIVA層に関係深い。
- 4層 土壌の切り込みがなされていることは確かで上記のIVA層に相当する。黒褐色土で中礫・細礫が散点するが安定した土壌である。
- 5層 におい赤褐色土で、粘質土と砂質土のところがある。遺物・遺構全くない。前記のIVB層に相当する。



第3図 土層図



第4図 発掘調査位置・標柱とグリット設定図

## (2) 遺構

### 〔ピット状遺構〕 (第5・6図・図版五)

E4～H4区の東半分を調査し、IVA層よりピット8個を検出した。ここは商店の車の出入口であったため、E4・F4区を先に調査し埋めもどし、その後G4・H4区の調査をする形となった。ピット8個が直列状に、しかも、ほぼ等間隔での出土である。上面からみると、どれもほぼ円形であるがP<sub>4</sub>とP<sub>5</sub>はやや大きい。深さもほぼ同じであるが斜面に添って北側ほどレベルが下がる。ただP<sub>8</sub>は性格をやや異にし、上面に小礫を丸く置き検出面から約8cm以下はピットが不明確になる。一応表面形態や位置等から、ピット遺構の範中に含めた。

どのピットにも、土石を混合して土器が混在していた。その土器の総数は約150点に及ぶ。ほとんどが無文である。土器拓影図から拾ってみると、15・20・34がP<sub>3</sub>、25がP<sub>4</sub>・14・20・39がP<sub>5</sub>、35がP<sub>7</sub>からである。今回出土の土器区分からみると佐野II式が含まれる。列状のピットは、せまい範囲での検出であり周辺の調査をしないと性格がわからない。

### 〔土壇 (第5・7図・図版四・五)〕

G4・K4区付近の東半分を調査し、3層下部より2基の土壇を検出した。

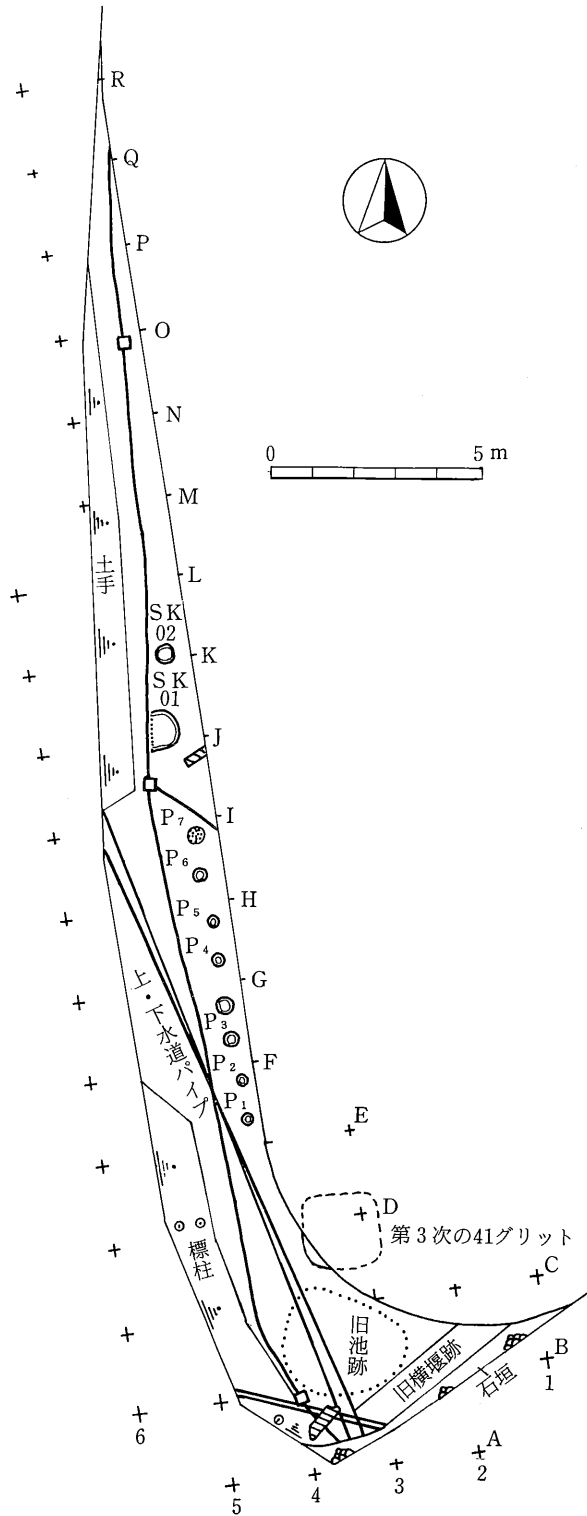
1号土壇 (SK01-E・W) 結果的には、2基の土壇が底部で切り合う形であった。排水パイプが障害となり不整形の半円状の検出となった。上層部、中層部、下層部各層の様相に変化がある。

上層部 径10cm内外の河原石10数個置く。近辺から持ち込んだらしく、地山の岩礫よりやや白い。土器片や石材片を含んでいる。

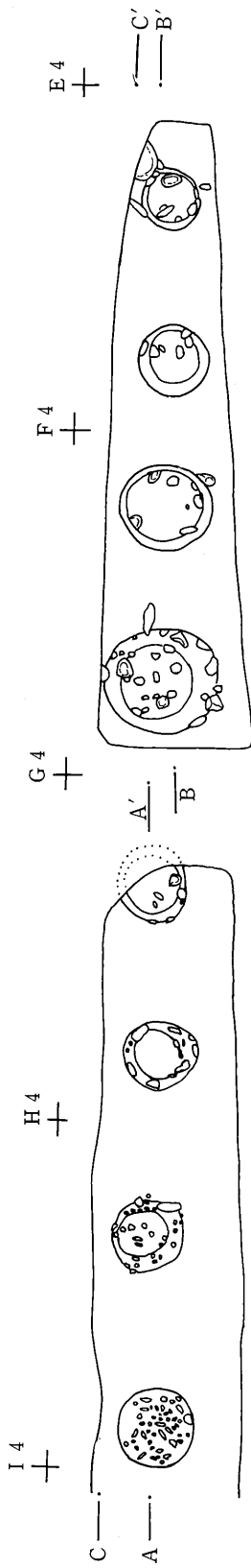
中層部 拳大の丸味のある河原石を2列状に置く。土器や石材の散乱状況は上層部と同様であるが、甕形土器片の氷I式(第10図42)が含まれていた。

下層部 西側の半分に、別な土壇(SK01-W)と切り合っていることが判明した。W遺構は、岩礫を抜き底部は約5cm位低くなっている。その中に打ち欠いた胴部と底部の土器(第12図1・5)が置かれていた。その土器にまじり、骨片と炭化物が少量確認された。胴部の土器は丸味を帯びており、表面の一部に赤色塗彩がみられる。この種の類例は少ないが、佐野I式の碗状の土器である。またこの土器の周辺から、石鏃未成品と石鏃(第11図1と18)のほか無文土器・石材等も出土した。これに対し東側(SK01-E)遺構の下底部は岩礫状である。特別な遺物は、ほぼ中央に石鏃(同図17)だけで、あとは土器片・石材片等である。EとWの切り合い関係をみると、Wの土壇を切ってEの土壇の中央部・上層部を形成している。

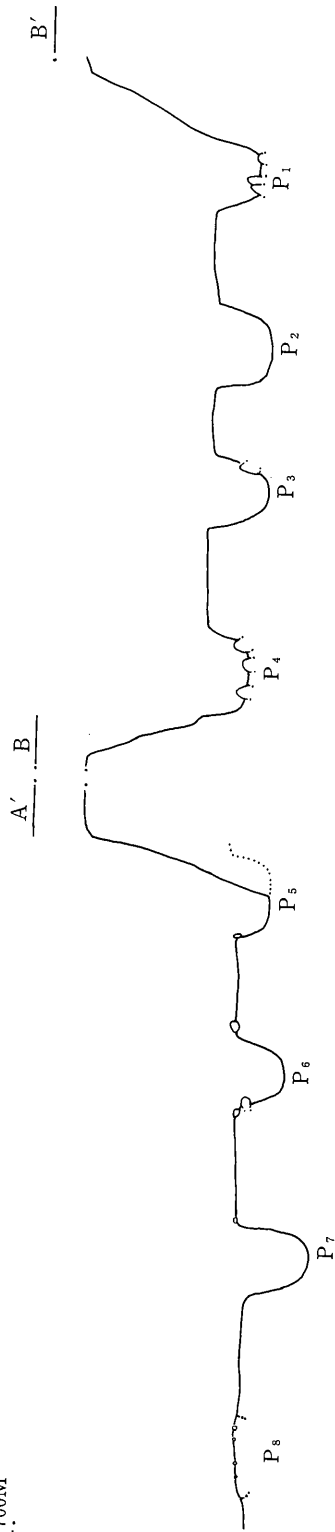
2号土壇 (SK02) 1号土壇の北側にある小土壇である。内部全面に焼土が広がっていた。土器は、佐野II式一点を含み数十点出土した。内部は無雑作に中小の礫が入っていた。1号土壇と同様な性格とみられる。



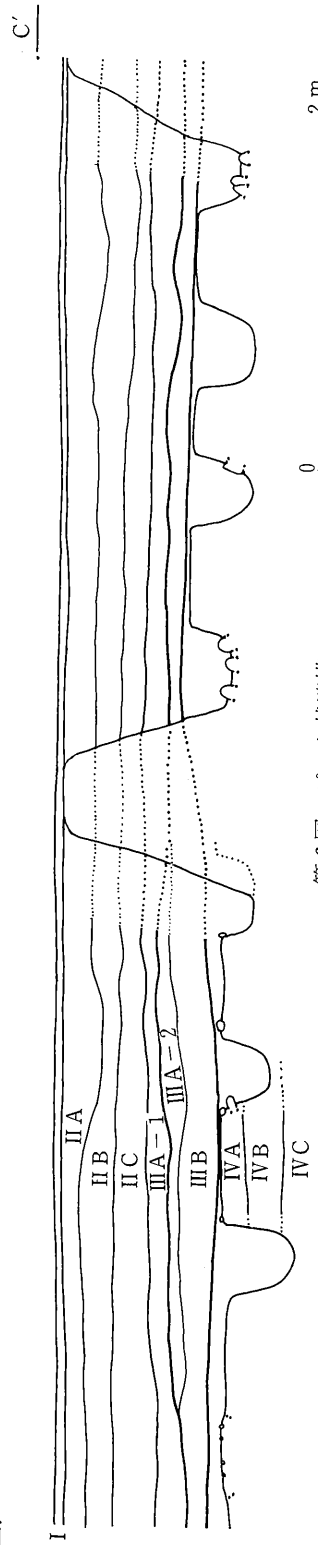
第5図 遺構全体図 (地下障害物を含む)



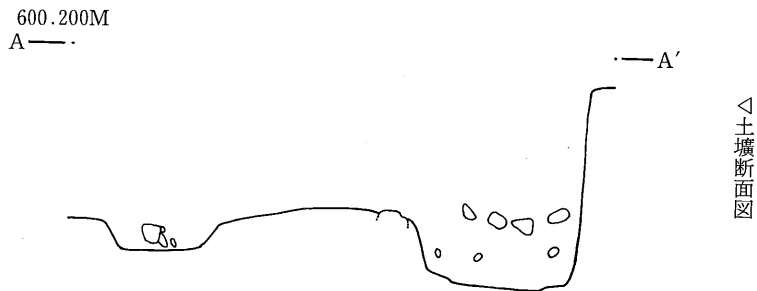
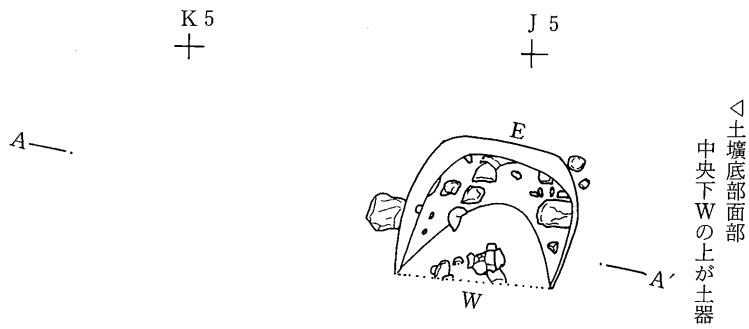
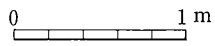
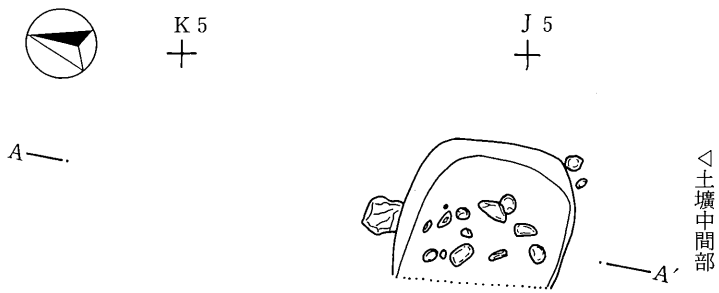
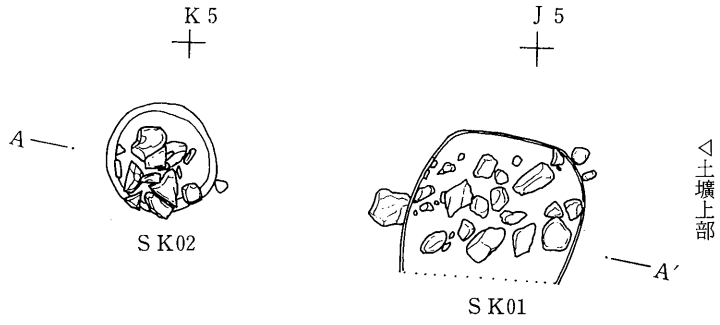
A  $\frac{600}{700}M$



C  $\frac{600}{700}M$



第6図 ピット状遺構



第 7 図 土 壇 図 ( S K 0 1 ・ S K 0 2 )



### (3) 遺物

〔土器〕 (第8・9・10・12図) (図版七・八)

今回の調査は、第七次までの調査と異なって、遺物の包含する層は複雑で多層であった。そこで、土層別・遺構別に遺物を取り上げ時期区分を試みた。しかし、遺物の出土状況は散乱状態であって、目的は達せられなかった。だが1号土壌(SK01-W)出土の2個体の土器は、安定した状態にあったので注目してよい。遺物には、今後再検討ができるよう位置・層位等を注記し保管した。出土土器のごく一部を除くと縄文晩期に属する。総数は約4500点に及ぶが、そのうち文様等のみられるのは一割にも達しない。以下調査者の力量で区分し所見を加えておくが、小区分しないで大きな区分にした。何分にも浅学なため、誤りが多いかと思うので研究者各位のご教示をお願いしたい。

晩期初頭関係土器(第8図1~5) 1は小波状の線刻文を口縁にもっており、県内では中南信地方によくみられる。2は口縁部で、波状線の区画の下に斜縄文をもつ。この1・2は、時期が若干前後するかもしれぬ。4・5は刺突列点をもつ。3・5は浅鉢であろう。

佐野I式関係土器(第8・9図6~25、第12図1) a・bに細分しなかった。6~12までは入組文をもつ小破片で浅鉢であろう。そのうち8は口唇に加飾をもつ佐野F群である。13は口縁部で雲形の規格を残している。14は鏈の手文の一部である。15から17は、佐野I群にはいり、口縁に押捺のある凸帯をもっている。東海地方に中心を置き、県内では中南信によくみられる。晩期初頭から佐野Iに併行する。18から20は、口縁に簡単な沈線をもつ深鉢か壺の類であろう。21から23は、小形の土器でI式に入れたがII式に及ぶ可能性がある。24から26は、大形工字文である。24・25は凸帯をもちI式としたが26はII式とした。第12図1の碗形土器は土壌(SK01-W)の下層部より出土した。口縁と底部を欠く胴部の一部分であり薄くて精巧である。文様は無いが、一部に赤色塗彩が残っている。類例は少ないが、調査団の判断で佐野Iに位置付けたが今後検討したい。

佐野II式関係土器(第9・10図26~39) 26は工字文の土器である。27から31までは、佐野M群である。口縁の下に数条の沈線をもつ、ほとんどが深鉢である。晩期初頭から佐野II式に平行するので、すべてがII式とは限らない。32・33は、飯山市山の神のM群でII式とした。34・35は、口縁の内外に文様をもつII式である。36から39はII式に含めたが、氷Iに近い感じがする。

氷I式関係土器(第10図40~50) 佐野遺跡で氷I式を正式に確認したのは今回が初めてである。40~42は、はけ状の条痕をもつ大形の甕・鉢である。氷Iの直前から氷IIに併行する。43から45は浅鉢であろう。46・47は氷Iでも古式である。48から50までは、氷IIに近い浅鉢や甕であろう。

その他(土器底部・第12図2~8) 底部だけなので、時期区分はわからない。いずれも径が大きいので、かなり大形の鉢・甕などであろう。いずれも粗製品であるが、底面に網代のあるのは5と7である。共に綾網であるが、磨耗しており細部の網み方はよくわからない。なお、上記の

SK01—Wの碗状土器と共伴したのが5である。

以上土器の主体は、佐野Ⅰ・Ⅱ式であるが、その前後に及んでいる。

〔石器・石製品 (第11図1～22) (図版六)〕

出土石器は、遺構に伴うものは少ない。表採や遺物包含層からがほとんどである。石器は石鏃を主とした尖頭形のものである。

石鏃末成品(1～3) 1は鉄石英で赤味を帯び美しい。2と3は共に頁岩で基部を欠く、石鏃の末成品か。

石錐(4) 十字形のドリルとみられるが先端を欠く。青緑色を帯びたチャート質の石器で、この形の石錐は佐野遺跡としては初めての出土である。

石鏃(5～22) 形からみると、菱形(5・6)・舌状形(7・8)・有茎飛行機形(9・10)・有茎三角形(11～13)・有茎普通形(14～19)・有茎長身形(20～22)になる。すべて有茎であり、縄文後晩期の特色をあらわしている。有茎飛行機形の石鏃は、第一次の発掘で2点出土しており、水式に伴う傾向もある。材質をみると玄武岩は、5・6・11・12・13・14・15・18・20・21・22である。チャート質は、9・10・16である。頁岩は、7・8・19である。黒燿石は、17である。この傾向は、表採・発掘による割合とほぼ同じである。

敲石(図版六) 河原の石で棒状(長さ11.7cm・最大径3.4cm)である。両端が丸くなっており使用痕がみられる。

軽石(図版六) ほぼ扁平な円形(最大径6.7cm・最大厚2.8cm・重さ50g)である。人工が加わっているとみた。

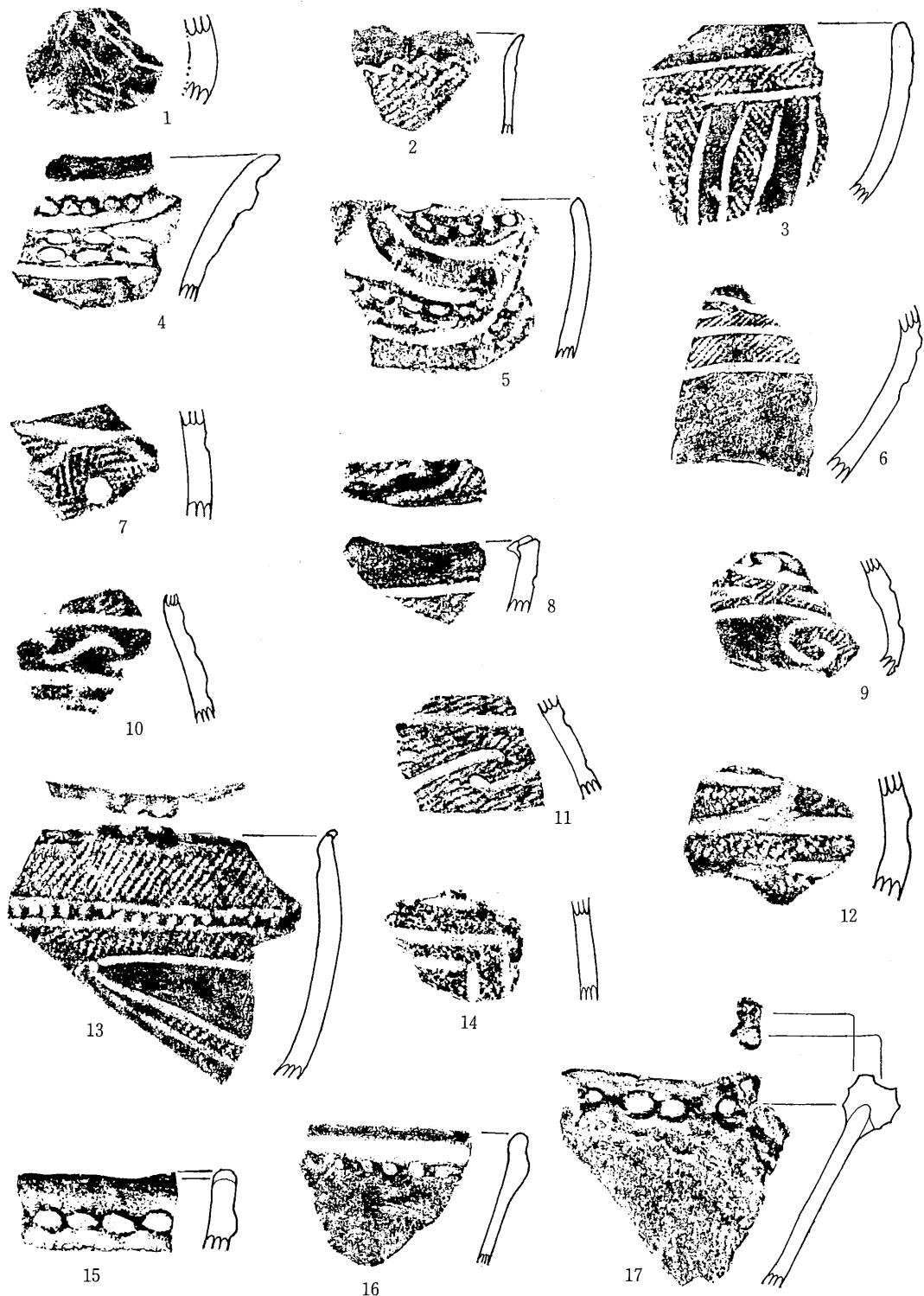
石皿 調査の宅地の地表から採集した。かなり大きいものだが、全体の五分の一程度(最大長37.5cm・最大厚10.3cm)安山岩の残欠である。

剝片(図版六) 末成品の段階で、石斧と呼べない。一点は頁岩、一点は地元の山の石で灰黄色をしている。

〔その他の遺物〕

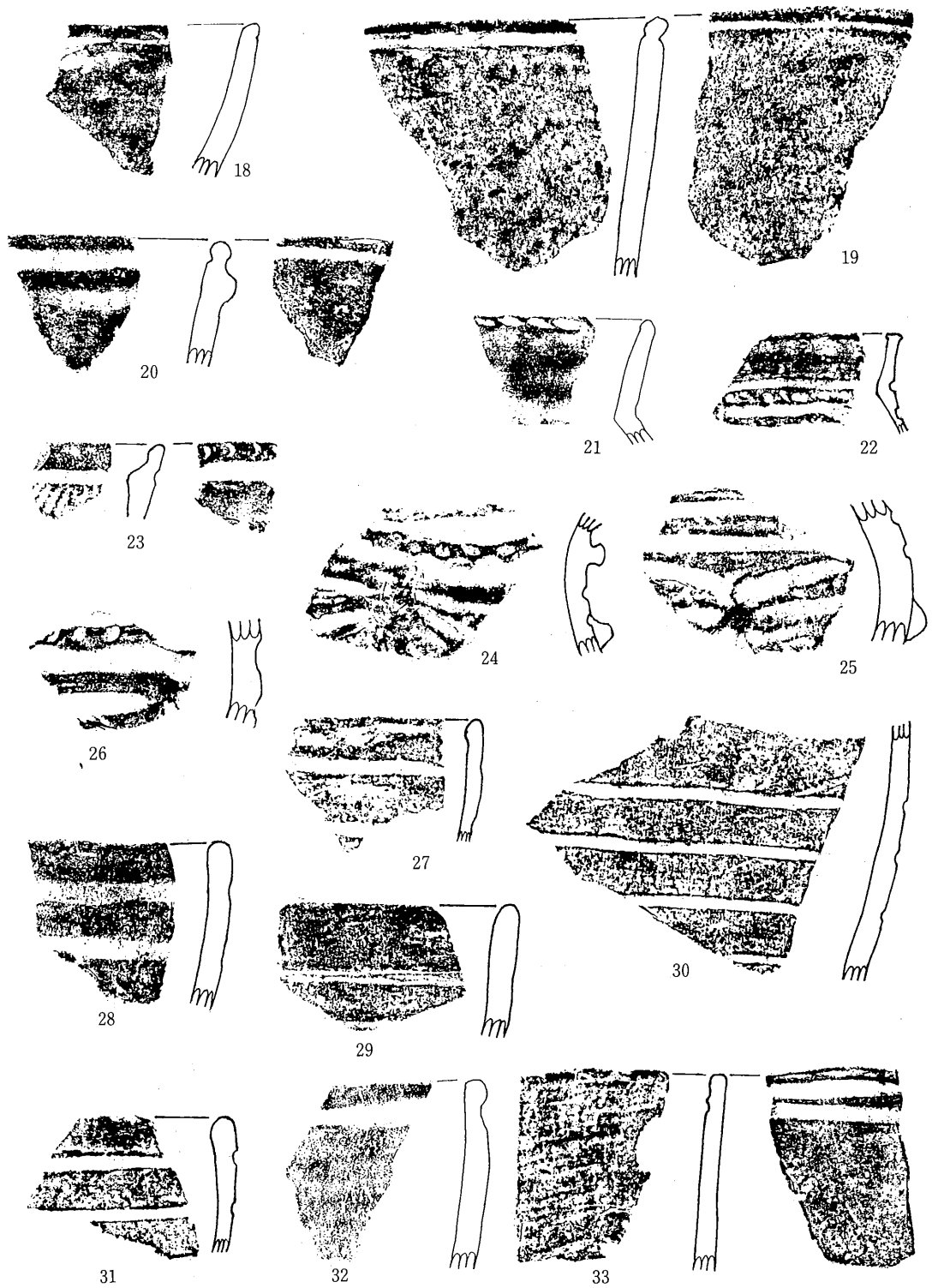
1号土壌から少量の骨片が出土した。炭化物も若干まじっていた。

中世の所産とみられる宋銭と、青磁一点が出土した。第四次から第六次までの調査でも、少量ではあるが中世の遺物が出土している。中世関係の遺構が史跡の内外に所在するかもしれない。



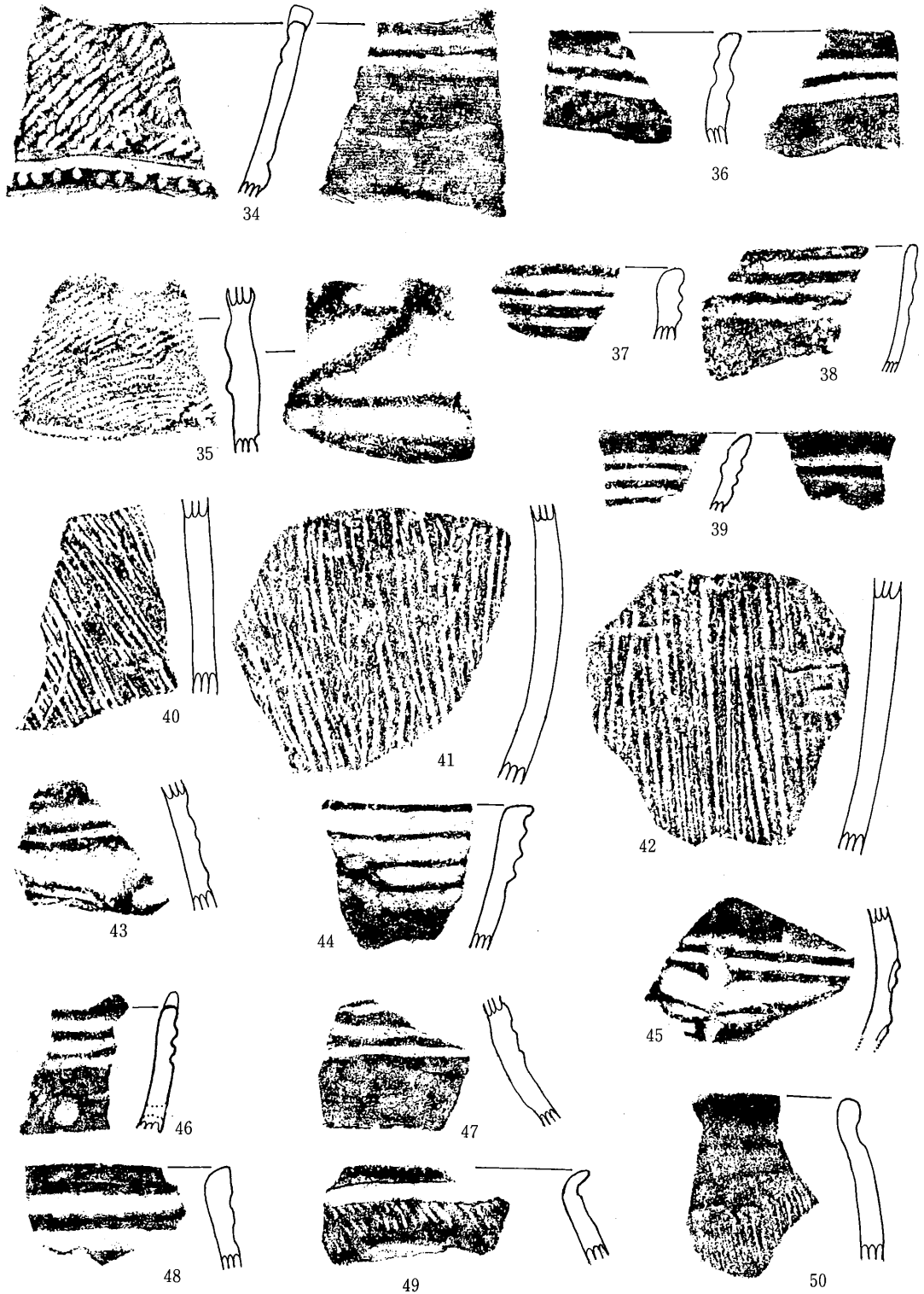
第8图 土器拓影图(1)

0 5 cm



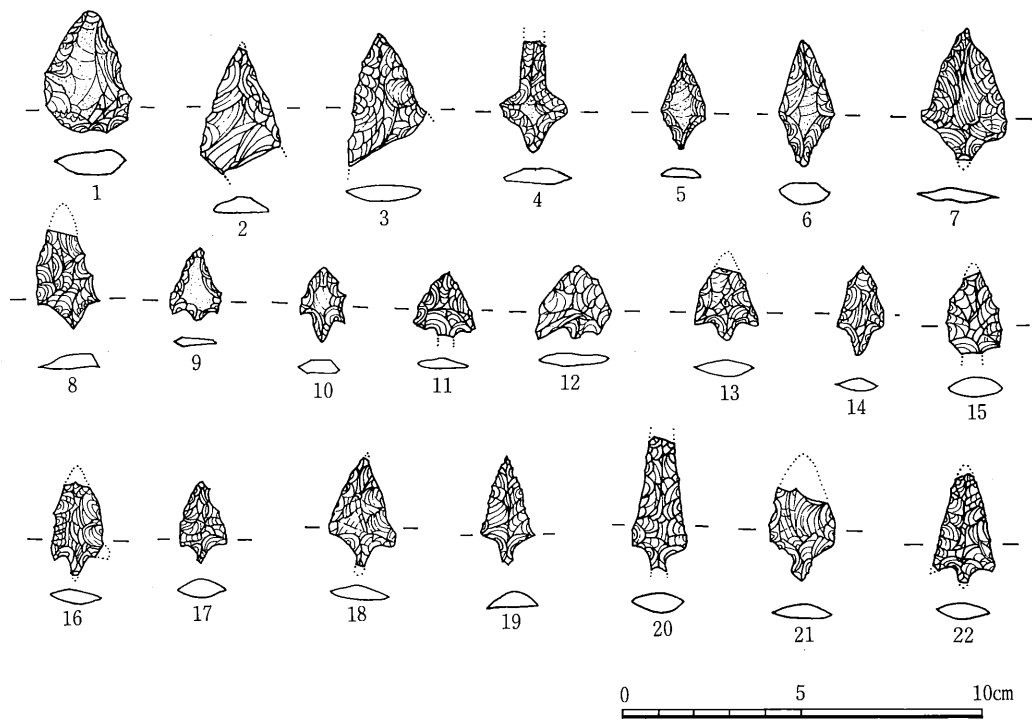
第 9 图 土器拓影图(2)

0 5 cm

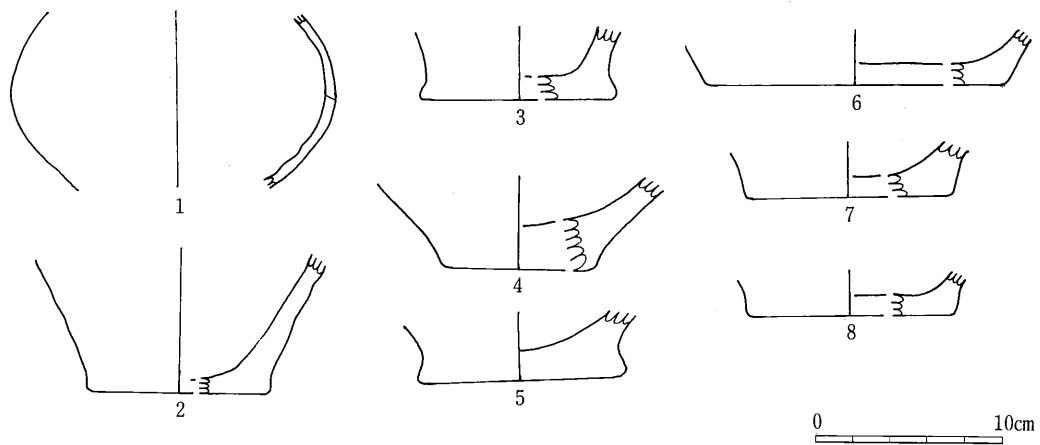


第10图 土器拓影图(3)

0 5 cm



第11图 石器实测图



第12图 土器实测图

## 5 ま と め

発掘調査をするからには、よりよい成果を得たい。そのためには、事前の準備作業が大切となってくる。その始めとして、測量に意を用いた。測量は山ノ内町役場の建設課にお願いし、平面測量をおこない、ポイントとなる位置にはレベルをおとしておいた。また今後の事を考え、佐野遺跡の標柱との関係を明らかにしておいた。それにより作成したのが、第4・5図である。特にレベルについては、中野建設事務所測定の本BMからでその精密度は高い。なお、遺跡の標柱下の北の角は603.015mである。

発掘調査の上で残念だったのは、地上・地下の発掘上の障害物である。その障害物は、第4・5図に示してある。図面をみると、いかに発掘調査の障害となっているかその位置がわかる。特に史跡内に宅地が広がっており、今後地下埋設物が多くなると思われる。これは今後考えねばならぬ大切な問題である。

発掘調査の完全実施の位置は、調査区のほぼ中央のごく一部である。すでに遺構の項で述べたが、ピット状遺構と土壌の出土である。第七次までの調査では、集石址が遺構の主体であったが、今回のように、地下へ切り込んだ遺構が検出されたのは当遺跡では最初である。遺構が地下深くに保存されていたことによる。まずピット遺構であるが、限られたせまい範囲での発掘であるので、事実を示すにとどめて、今後の問題としておきたい。ただこのような類例は、他地域にもみられる。佐野遺跡と時期的に近い新潟県中郷村笹峰遺跡をはじめ、北陸地方から類例が認められている。現段階では、これらと比較するにはまだ不十分な調査資料である。

次に土壌であるが、1号土壌（SK01-E・W）は切り合う2つの土壌である。E遺構は、上層・中層・下層とそれぞれに特色を残している。このような事例は、数少なく貴重な事例となる。また、W遺構の底部からは、焼土・炭化物・骨片と、碗形土器と土器底部が伴出した。この遺構は、火葬墓とみるが、伴出した遺物が時期決定の資料となり得る。これもよい資料である。

ピット遺構の検出された付近の土層は、深いだけでなく複雑であった。佐野遺跡内の各地点の土層については、範囲確認調査（昭和50年）のうちに基本的には土層が確認されている。しかし、この地区の土層は特例であろう。表面には近年の盛土があり、地下には無遺物層によりパックされた遺構のピットが所在した。ここは、現在の三沢川と約50m近接する位置にあり、下層部は川の氾濫と深い関係にある。この複雑な土層を今後に残し、研究資料としたいので土層の転写をはかった。土層の転写は、山梨文化財研究所の研究員によりおこなった。なおこの転写土層は、保存額をつくり、山ノ内町教育委員会が保管している。今後考古学の研究者ばかりではなく、他の分野の研究でも利用が期待される。

遺跡内の集石が、自然の集石か、人工の集石址か、その判断をするによい事例が今回みられた。それはⅢA層における小集石群であるが、調査の結果自然集石であることが判明した。その判断

は、実測後岩礫を取り上げてみたが、III A層に自然に乗っているだけであった。また遺物の土器は、磨耗した小破片だけであったことによる。しかもこの状況下では、遺構らしきものが無かったことも判明した。この事は、今後の佐野遺跡の調査の上で役立つであろう。

遺物であるが、土器関係約4,500点・石器関係約30点が出土した。遺物の出土地は、調査区全域である。しかし遺物は、地下障害物とした現在使用のパイプや、旧水田・旧堰の工事とも関係深い攪乱部を含んでいる。ほとんどが無文土器であって、文様のあるのは小破片を含めても100点内外である。この点無文土器の整理も大切になっている。今回の調査では、そこまでは手がとどかなかつた。しかし、文様のある土器はバラエティに富んでいた。特に当遺跡では、縄文晩期前半の遺物だけとみられていたが、後半初頭の氷I式等がみられた。土器拓影図を参照願いたい。

ピット遺構や土壌と遺物の関係をみると、直ちに断定できないが、ピット遺構には佐野II式がみられる。また、切り合う土壌（SK01-E・W）ではE遺構の中層部からは氷I式の土器がみられる。Wの遺構の底面からは、佐野I式の碗状土器が出土している。二つの切り合う土壌の時期関係を明確にしている。土壌とピット状遺構の関係は、土層関係の現状とピット状遺構の性格が不明なので現在何とも言えない。また従来検出の集石址は、佐野I・II式と関係が深かったが、1号土壌のE遺構の中層部内発見の氷I式土器をみるき限りでは、時期的に新しい遺構が検出されたとみたい。

今回の調査企画は早くできたが、調査日程がおくれた発掘であった。調査員や作業員を緊急にお願いしたが人員が揃わず、田川が主として調査に当たった。さらに8月の前半は暑さがきびしく、後半は雨にたたられたのは何とも皮肉であった。しかし、文化庁・長野県教育委員会文化課・顧問・団長・団長代理等の指導のもとに調査を進めた。そして町教育委員会の努力や、南部地区協議会・工事関係の中野建設事務所より側面からの援助をいただいた。また町建設課の精密な測量や、山梨文化財研究所の土層転写は貴重な資料となった。発掘中毎日お世話になった地主の藤沢春枝・富沢均の両氏には大変めいわくをおたけしました。そのほか大勢の方々のご協力で調査が終了しました。関係者各位に厚く御礼申し上げます。

|        |                      |           |
|--------|----------------------|-----------|
| 主な参考文献 | 佐野                   | 昭和42年     |
|        | 山ノ内町誌                | 昭和48年     |
|        | 佐野遺跡範囲確認調査報告書        | 昭和50年     |
|        | 佐野遺跡発掘調査報告書（第四次～第七次） | 昭和52年～57年 |
|        | 佐野の歴史                | 昭和54年     |
|        | 長野県史 考古資料編           | 昭和58年     |



---

---

—— 県道交差点改良工事用地内  
埋蔵文化財緊急発掘報告書 ——

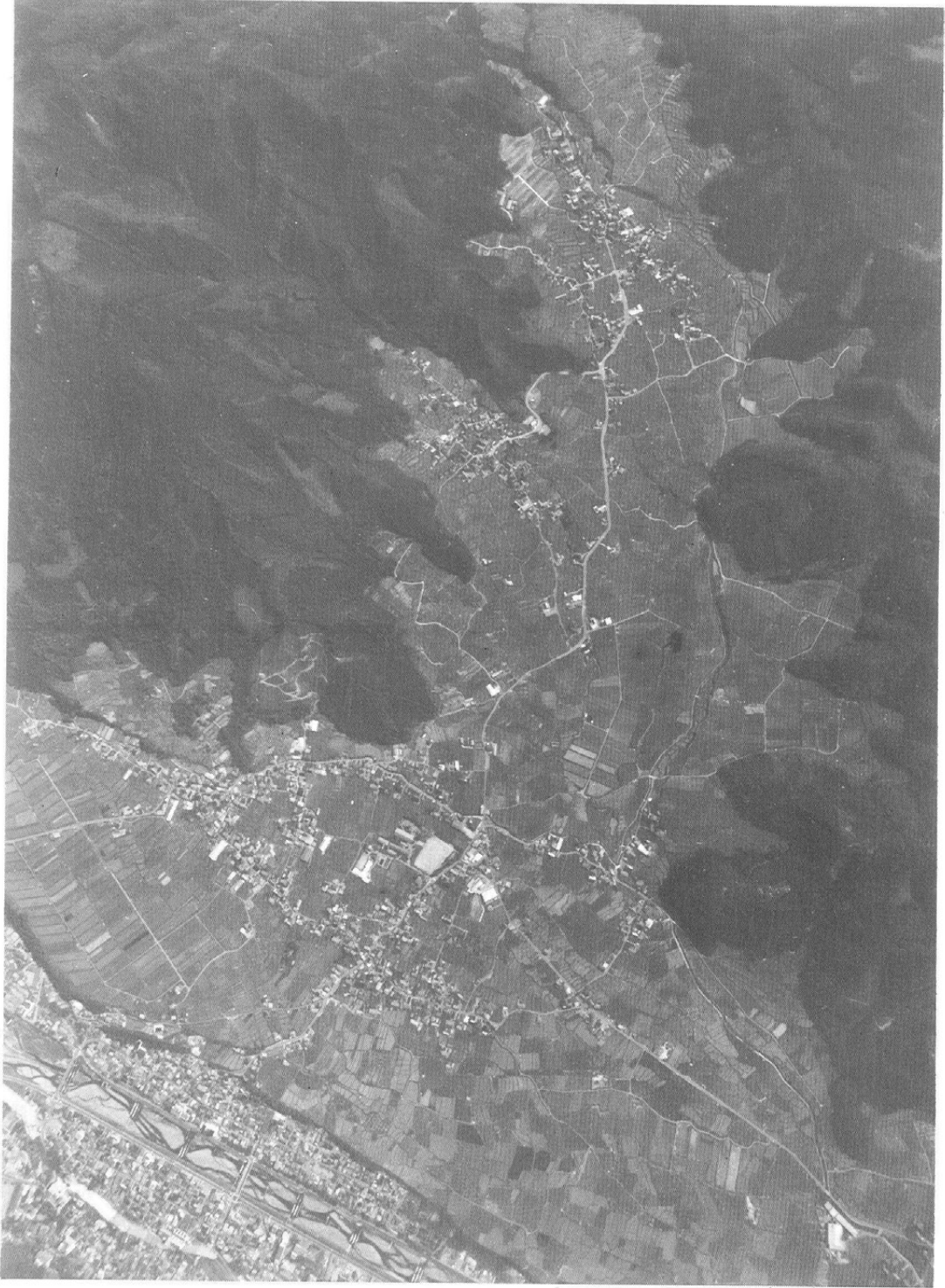
## 第八次佐野遺跡発掘調査

発行日 1989年 3月31日

発行者 長野県下高井郡山ノ内町湯田中  
山ノ内町教育委員会

---

---



佐野遺跡周辺 中央少し下が遺跡

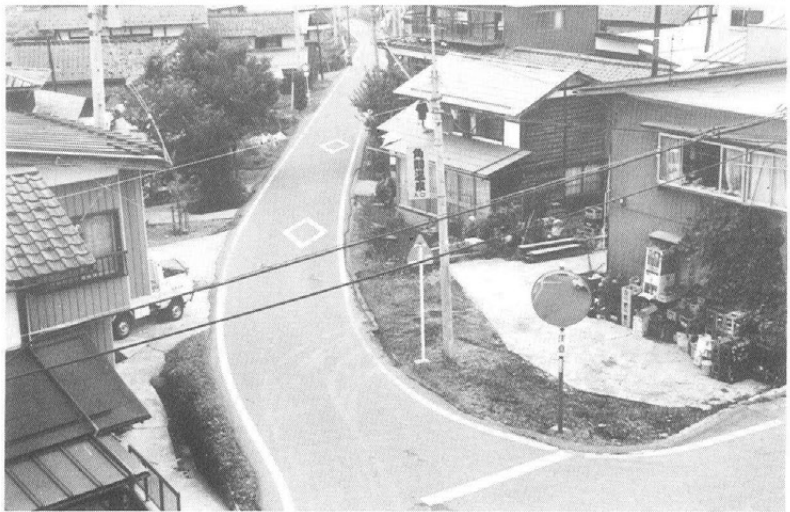
▷ 発掘前の状況(1)  
コンクリート舗装部分

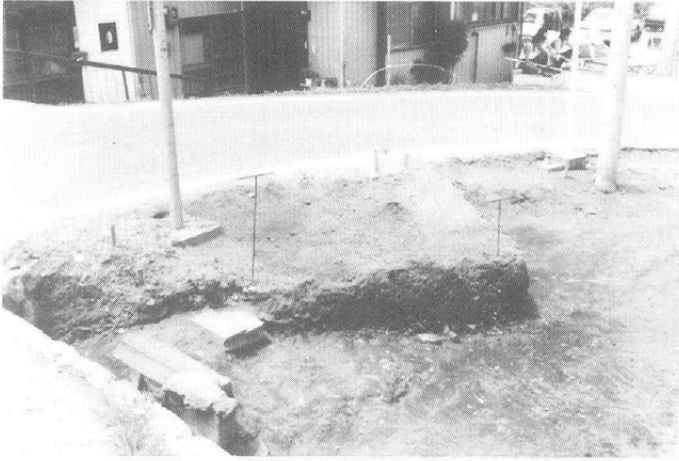


▷ 発掘前の状況(2)  
発掘のため舗装部分除去



▷ 発掘前の状況(3)  
中央の細長い土砂の部分が今回の調査地区





◁ C 4 区付近の盛土（1層）



◁ G 4 東側土層 II A層からIV A層

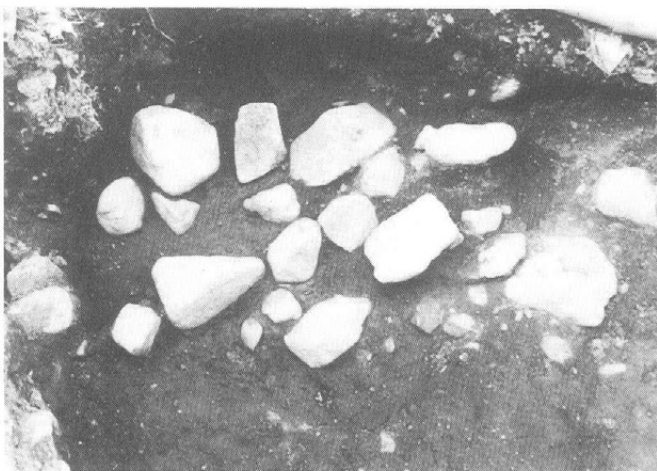


◁ 自然集石群 E 4・F 4区ⅢA層



◁ 遺跡の発掘状況 障害物が多い

一号土壤上部



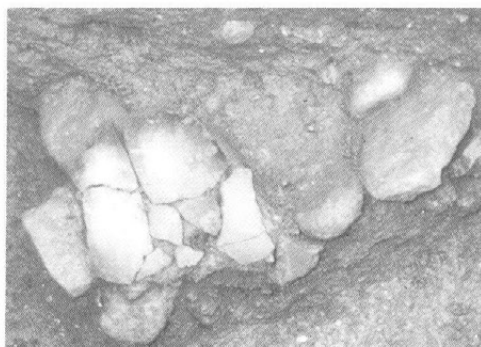
一号土壤中间部



一号土壤底部



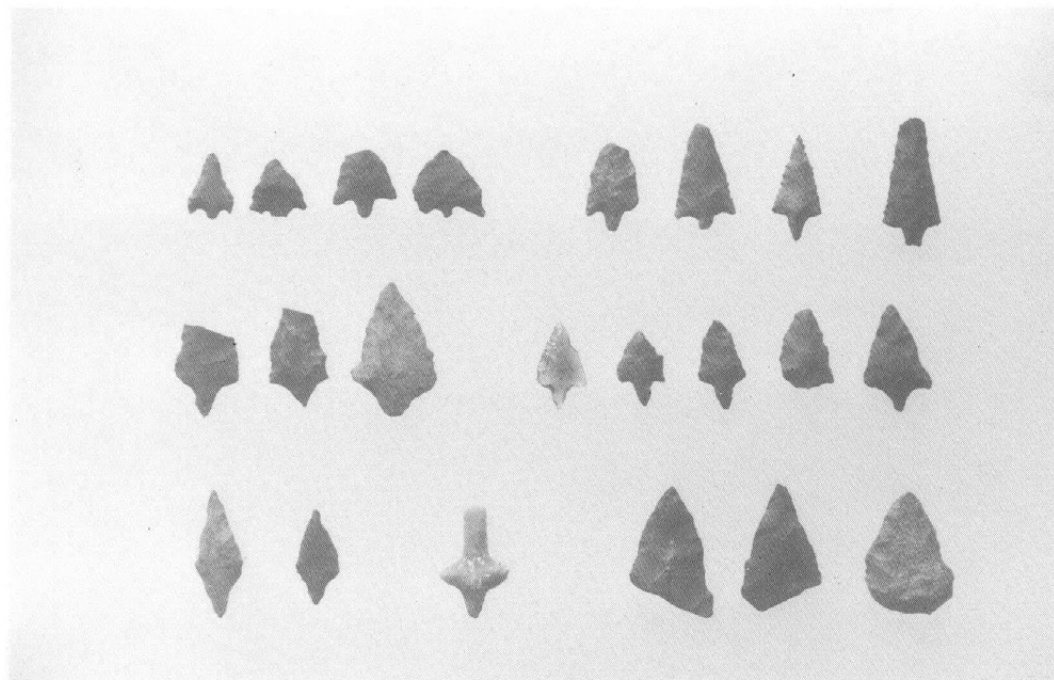
一号土壤底部土器



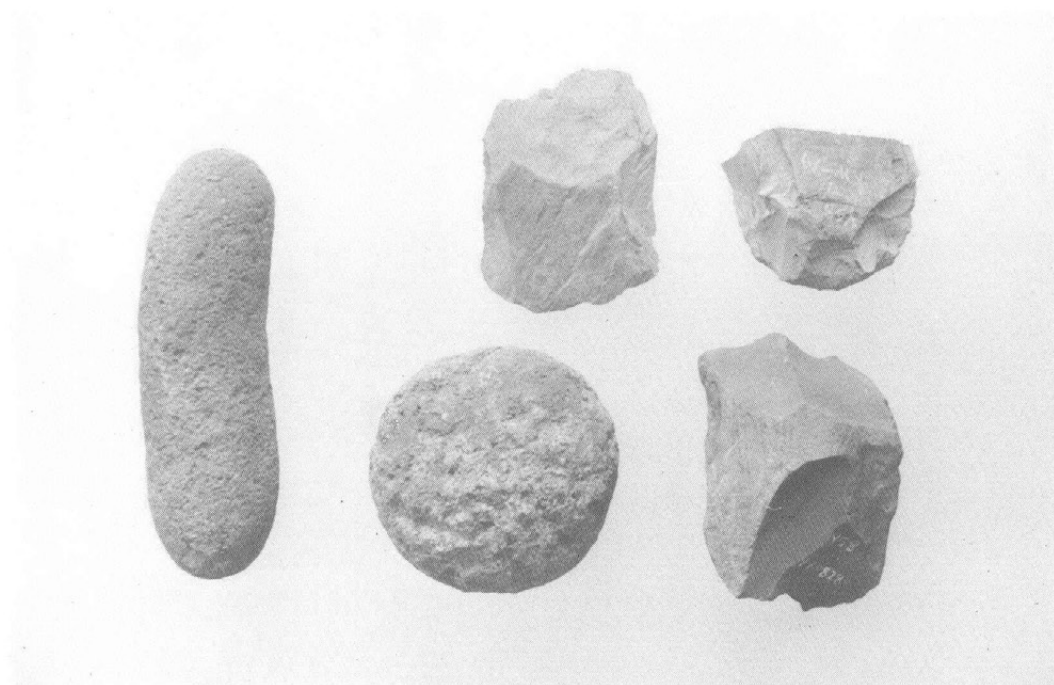
ピットの遺構  
上からP<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>  
手前の小集石がP<sub>8</sub>



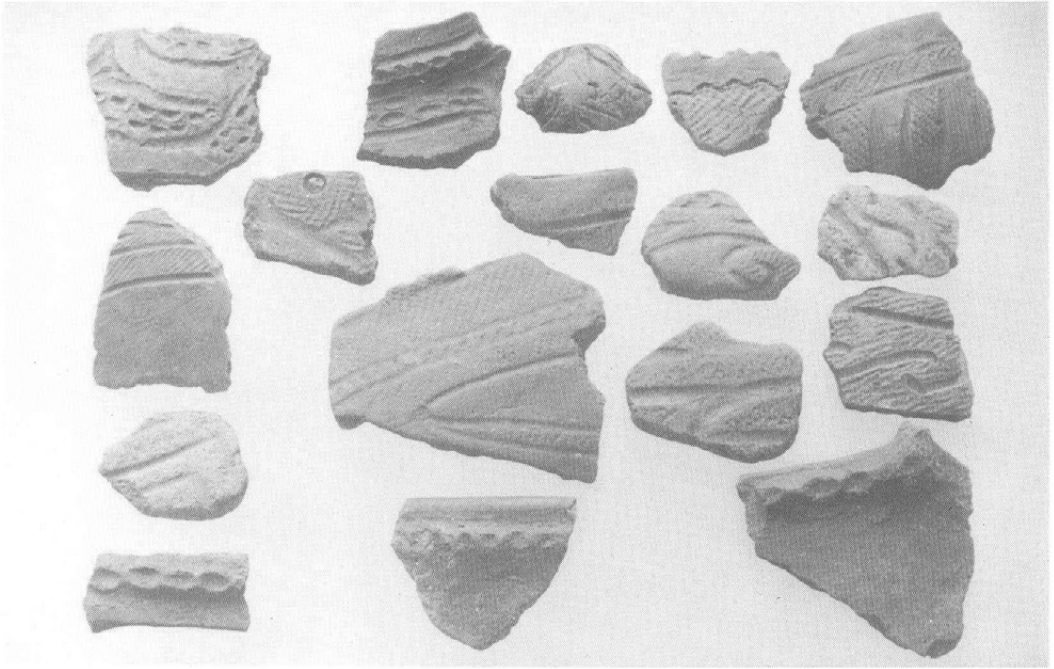
△2号土壇



△出土石器 (1)



△出土石器 (2)

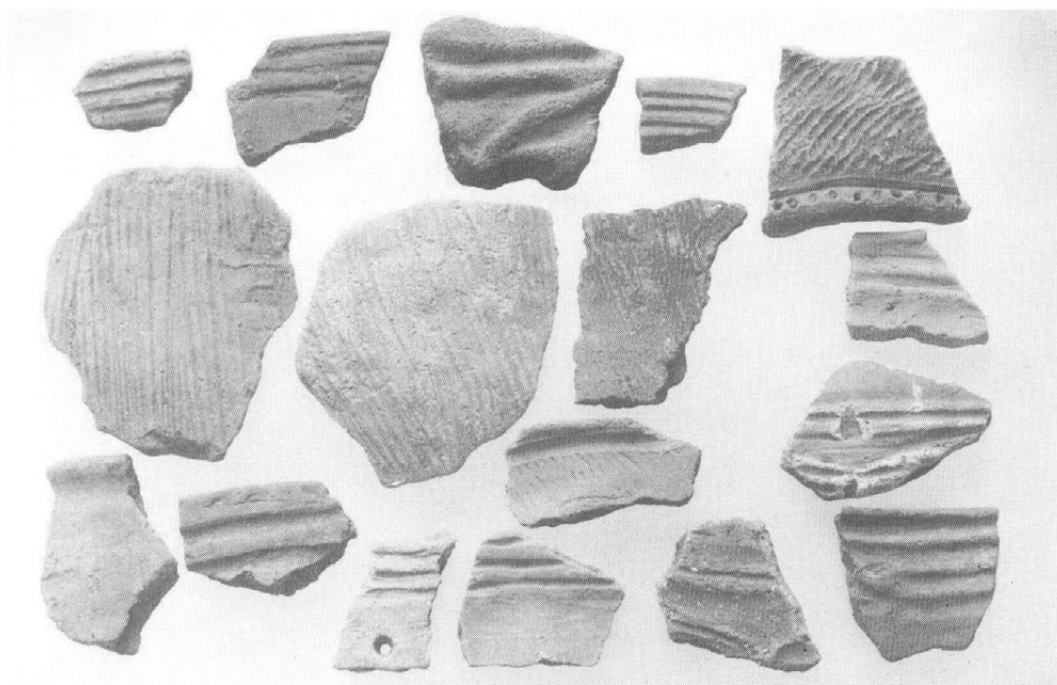


△出土土器 (1)



△出土土器 (2)





△出土土器 (9)



△発掘風景

